

荒野の詩

京都府 岩崎孫 載

―門 出―

昭和十七（一九四二）年十二月十日、福知山歩兵第二十連隊入営のため前日故郷を出発する。家族は自分一人で母の生家で伯父様宅よりの門出となる。あいにく昨夜来の積雪が十センチほどあり、なお容赦なく降り続く。大原神社本殿にて武運長久の祈願を受け、折から見送りのため大原区民総出動のうち絵馬殿広場において区長さんより激励の御言葉を賜り、自分は献身報国の決意を出発の挨拶とする。

「バンザイ！」「バンザイ！」の声援に送られて小学校へと急ぐ、降雪のため講堂で行われた村主催の壮行会に臨む。一般村民各位、在郷軍人、国防婦人会、男女青年団、それに小学生等、講堂狭しとお集り下さる。自分一人のためにかくも多数

の激励を賜り万感胸に充つ。村長の山内宇市様より声涙共に降る激励のお言葉を賜れば、若輩の身を以て殉国の決意を述べ答礼とす。壇上より見渡す皆様の眼は真剣そのもの、我が身に迫る思い。

降り続く雪の中、沿道に見送りの皆様の天に轟く「バンザイ！」の声と、手に手に打振る日の丸の旗の波、その感激は到底筆舌には尽くせない。六十数年に至らんとする今日にもその声、あの旗の波は、耳の底、瞼の裏に歴々と蘇える。その日は福知山の旅館で一泊す。

―入 営―

十二月十日、いよいよ入営の日である。生来味わったことのない緊張感を以て営門に入る。兵舎に入ると直ちに官給品を与えられ、初めて軍服を着る。ここで直感したことは北方の戦地へ行くだろうと思った。それは防寒具が整い略帽（戦闘帽）だったから。暖房一切無く、金属製の寝台、毛布数枚、それでも緊張のため別に寒いとも思わなかった。先輩から軍隊生活の要領を詳しく聞いてき

たので、あまり戸惑うことなく大いに助かる。またま中国戦線より帰還せし郷土の先輩たち四人が同兵舎の二階に在りて、貴重な体験を聞き色々とお世話になった。

親族と面会の時など。その差入れを与かつて頂き、夜になつてから物干場で食したこともあつた。彼等は近日中に召集解除となり帰郷せられる方である。

初年兵受領のため現地より多数の将校、下士官が来ておられ、自分等はその部隊に編入した。後日判明せるに、その部隊とは北支那派遣軍独立混成第四旅団第十一大隊第二中隊、略称して北支那派遣力第二五九二部隊浜岡である。連日の訓練と共に戦地へ行った時の注意と心の準備をせよと、再三にわたり班長よりお達しがあり、数日が過ぎ、いよいよ我々は近く祖国を離れるのか親族との面会が数回行われた。

— 福知山出發 —

昭和十八年の正月もそこそこに出動命令下る。

一月六日早朝、完全武装して営庭に整列、部隊長（陸軍大佐）から馬上より訓示あり。営所を出發、予め親族に連絡してあつたので多数福知山駅ホームまで見送りに来てくれた。列車は軍事機密のため窓は半開、これが今生の別れになるかと思えば冷たいものが背筋を走る。折しも誰からともなく「暁に祈る」の歌が起こつた。胸が詰まる思いで合唱となる。荘厳とも悲壮とも、その心境は送る者送られる者一体であつた。車窓を走る祖国の山河を心ゆくまで脳裏に焼きつけて、七日早朝下関に着いた。早速、関釜連絡船に乗船す。八、〇〇〇トン級とか、敵潜水艦の魚雷攻撃を受けたる時の注意を受け救命胴衣を渡された。

— 祖国を離れ 大陸に上陸 —

一月七日、船は静かに岸壁を離れた。これが真実日本の土とも永遠の別れかと思う。玄界灘に差し掛かったころから全員船酔いが激しく、ほとんどの兵が酔つた。便所は汚物と悪臭で目も当てられない。それでも自分は大丈夫であつた、何かの

御加護であろうか。約八時間で敵艦の攻撃もなく釜山に上陸、初めて踏む大陸の土である。

これより数日間汽車の旅、広軌であるから横五人掛けで朝鮮半島を北上、鴨緑江を渡り中国に入る。列車は満州南部（中国北東部）を西進、一月九日、山海関通過、北京を経て京漢線（北京―漢江）を南下、石家荘から西へ折れて石太線（石家荘―太原）を一路山西省へ進む。

車外は零下二〇度以下のため列車の便所は使用と同時に凍結する。停車するや直ちにハンマーで叩いて除去していた。釜山を発ってから四日目の晩であろうか、山西省陽泉に到着す。

翌朝数台のトラックに分乗して濛々たる砂塵を巻き上げながら、大行山脈を縫って、河か道路か道なき道を南下す。

―駐屯地警備及び初年兵教育―

山西省昔陽県東咨頭鎮と言う地名である。小高い丘の上に兵舎が一つ、付近には民家も見当たらず、周囲は木も生えていない岩肌の岬々たる連山

である。標高一、五〇〇〜二、〇〇〇メートルぐらいはあるか、殺風景その極に達す。余りの光景に心も荒んだが、そんなに考えている余裕はない。直ぐに連日の猛特訓に突入す。

初年兵教育の一端を記すと、班長吉田陸軍伍長、起床号令と共に跳ね起き、服装を整え、寒風吹き荒む丘の上の広場に我れ先にと整列、この時の順番が後日の昇進に関わる。山脈の峰がようやく白み始めるころ祖国の空に向かって遥拝、点呼が終わると同時に班内へ帰る。早速、各自分の分担にて下士官室及び班内の掃除、飯上げには炊事場より食事を運ぶ。班長古年兵の分は何事も優先し、洗面する間は無い。飯に汁をぶつ掛けて一気に食べる。

終わる間もなく出動準備、武装整列で一日の訓練が始まる。前進、散開、射撃、匍匐前進、突撃、実弾射撃、黒眼鏡を掛けて夜間の静粛行進、銃剣術その他くたくたになるまで反復演習で、何事も適切な判断と機敏な動作が要求される。昼夜を問

わず敵襲ありて出撃しなければならぬ。ある日
ついに、初年兵安井兵長（戦死後昇進）戦死す。

夕刻、兵舎に戻ればさらにてんこ舞い、その
の忙しさは体験者のみ知るところ。一日中黄塵を
被り、兵器、被服はもとより、顔から口の中まで
砂でジャキジャキである。兵器、被服の手入れ、
洗濯、飯上げ、さらに班長、古年兵の分も初年兵
がやらなければならぬ、身体がいくらあっても足
りない。照明は石油ランプ、銃の手入れ中に誤つ
てそのランプに当って壊すことがある。その時は
一大事、夕食が終わってちよつと一服と言う訳に
はいかない。その日の反省として古年兵よりい
ろと文句があり制裁を受ける。つまりビンタが
飛ぶ。それで終わればよいのだが、クドクドと長
時間やられると本当にウンザリする。

夜の点呼が終わって消灯、床に入れどもおちお
ち眠れない。週番上等兵が巡視に回ってくる。銃
架の銃の引き金を点検する。もし「カチツ」と音
がすれば、その兵は叩き起され、きつい制裁を受

ける。「銃が休んでおらぬのに貴様よくも眠れる
か」と。

月に数回夜間の歩哨勤務がある。兵舎の周囲に
あるトーチカの上に立哨する。防寒具に身を固め
ておれども夜間の寒風は骨身に凍みる。真つ暗闇
の中近付く者は皆敵である。立哨一時間、交替時
間になると一命があつたかとホツとする。

兵舎内の暖房は良好、石炭貴重なれど外は酷寒、
洗濯物は枝の如く氷、その上黄砂のため乾かぬう
ちに黄色くなってしまう。実弾射撃二百く三百メ
ートルあり、中隊最高点にて、五十分の四十九点、
大いに賞賛を受く。

―衛生兵教育―

命令により隊付衛生兵に任せられ陸軍衛生一等
兵に命ぜられる。その教育を受けるため当中隊よ
り二人、自分と宮脇一等兵が陽泉陸軍病院に派遣
された。ここは電灯あり、街には鉄工所があるの
で夜間も明るい。全く未知の教育で、その上度々
の試験ありて心休まる暇もない。

教育半ばに至りて班長石橋衛生曹長より下士官志願を熱心に進められた。その理由は、この戦争は何年かかるか分からない、三年や五年で軍隊から解除されることはないだろう。そうなれば階級が上位であるのがよいと。熟慮の結果志願に決す。

ところが第十一大隊付軍医尾崎軍医中尉殿より下士官志願をすれば隊付衛生兵が欠員となり、隊に支障を来たすとの御意見御叱りあるも自分の決意は堅く事情を説明し辛うじて許可を受けることが出来た。後日この決断が生死の岐路となろうとは神のみぞ知るところとなった。

昭和十九年夏ごろ、自分の所属部隊独立混成第四旅団は沖繩へ転進、自分は教育中なれば追従不要とのことで他隊へ転属。沖繩の部隊は後日全滅となる。

当病院へ慰問団高峰三枝子一行来る。「湖畔の宿」の美声を初めて聞く。兵隊はこうした慰問団の来演をいかに待ちわびていることか。六十数人隊付衛生兵としての知識をみっちり叩き込まれ帰

隊命令あり、帰隊の申告を自分に下命された。

—昭和十八年秋、冀西作戦—

再び原隊に復帰、うだるような酷暑も過ぎ、部隊は一部を残して娘子関北方の大作戦に参加することとなり身辺を整理して出動す。時の中隊長は堀陸軍中尉である。自分は折悪しく風邪を引き、部隊は娘子関にて一日休養せるも三八〇九度の発熱あり、その晩は夜間の出撃となり娘子関北方の劍岳を登る。道らしきものは無く、岩と石ころの谷間を進む。熱は下がらず苦痛なり。だが落伍は出来ない。

山中でついに接敵、たちまち銃声と閃光が空に飛び交う。多数の至近弾もあり、直ちに応戦、猛烈な反撃を浴びせる。夜明け近く敵は四散せる模様。古年兵の機敏な行動に感服す。

そのうち山頂にて第十一大隊本部と合流、以後二カ月余り作戦行動を続行す。自分は常に中隊指揮班にあり、数日間索敵進撃中かなりの幅の河岸に差し掛かった時、突然対岸の葦の繁みより猛

烈な銃撃を受ける。右は岸壁左は河岸にて遮蔽物は無く、敵弾が身辺の岩に当って飛散するのが見える。地形上応戦するのは不利と判断、全員は全力で疾走、その場の離脱に成功す。後衛尖兵の機関銃と擲弾筒の反撃にて敵を鎮圧、一兵の損害もなく敵の攻撃を退けた。

このころようやく下熱し楽になった。ある日、中隊長を先頭に、とある部落の入口に続く石畳の道を進撃中、突如轟音と共に眼前に白煙濛々、反射的に身を伏せたが耳がツーンとしている。しばらくして頭を上げると状況が判明した。中隊長の後方に続く四人目の軍曹が地雷を踏んだものであった。

当人は重傷で大腿部裂傷、首から顔面に無数の破片を受け、加うるに爆風のため顔は真黒に火傷を負っていた。他に二人の軽傷者あり直ちに火傷処置を施して後送す。幸い地雷が小さく自分は八番目にいたので異常はなかった。

時折友軍機が飛来し、作戦指令の通信筒を投下

したり、地上の通信隊と交信す。当時は制空権はまだ我が軍にあったので敵機の襲来はなかった。その後数日間、交戦を続けながらある地に駐留して、小隊単位で物資の収集に出勤する。通路には地雷が敷設してあり油断がならぬ。不明の地にて方位を知るには所々に「ミョウ」と称する祠あり、日本の辻地蔵さんに似たものでこれは必ず南向きに建ててある。

十一月中旬ごろ、旅団本部より下士官教育のため北京へ行けとの入電あり、作戦半ばにして部隊に別れを告げ、予備下士官候補の高田兵長と共にトラックに便乗、一路石家荘に出る。

原隊駐屯地に帰隊するも折り返し北京に向け出発、途中太原に一週間滞在する。この地に駐屯する第十二大隊には、郷土出身の一年先輩で沢田、西山の兩人がいるはずだが会えなかった。後日兩人共に沖繩で戦死せり。

― 衛生下士官候補者教官 ―

昭和十八年十一月末、北京に到着、北支方面軍

衛生下士官候補者教育隊に入隊する。この隊は北京郊外の青華園にあり、百メートルほど隔てて北京陸軍病院がある。軍医、衛生兵、看護婦、軍属など毎日見える人はほとんど日本人で内地にいるごとく錯覚する。

下士官候補者三百数十人は三個区隊に編成され自分は第二区隊第二班、区隊長は深田陸軍中尉、班長は野口陸軍軍曹、以後十カ月余の教育期間に入る。受講課目は二十数課目、毎日勉強の連続で、試験の時は消灯後も明りあるところを求めて、朝は払暁から屋外でと、生涯で最も勉強に熱中した期間であった。そして陸軍衛生上等兵を命ぜられる。

受講の概略を記すと、人体各部、皮膚、筋肉、骨格、脳、神経、血管、内臓、淋巴管及び淋巴腺等の名称と機能、医療器具の名称と使用法及び消毒と滅菌、多種多様の負傷者に対する応急処置、止血、包帯、副木、人工呼吸、各種注射法、皮下、皮内、筋、血管、瓦斯瘰癧、破傷風の血清注射、

各種疾病の症状と処置、特に法定伝染病、寒冷地、熱帯地その他各地の戦闘地や駐留地の兵員の健康管理、野戦における給水、衛生濾水機の使用法、対毒瓦斯、噴嚏催涙、麻爛、窒息、神経の訓練、野戦病院を開設して負傷者の收容と後送等々、かくも多数の受講訓練を短期間に終了せしめるもので、心身共に休まるものでない若さとは誠に貴重なものだ。

内地より慰問袋を頂く、物資不足のとき有り難く頂戴す。翌年四月ごろ、何としたことかカッター性黄疽に罹り隣りの陸軍病院へ入院のやむなきにいたる。教育の遅れが最も気掛りだが治療第一と考え四十数日間入院す。

昭和十九年も半ばに至り戦況は次第に我が軍に不利になりつつあると聞く。大陸戦線はあまり変わりはないが、太平洋の各地においては物量豊富な米英軍に対し苦戦し敗退が濃くなって行く。そのうち自分の部隊が沖繩へ転進と聞く。我々は教育中のため追従不要とのこと。一抹の不安があつ

たが後日沖繩は全滅となったのだ。

教育中前線の友軍の損害も日ごとに増加し、当陸軍病院へ傷兵收容のため数回応援に出動す。勉強と試験に明け暮れた長く短かった十カ月が終了した。

昭和十九年六月、陸軍衛生兵長を命ぜられ、同年七月、第百十師団野戦病院に転属、昭和十九年八月に教育終了、同年十月、陸軍衛生伍長に任ぜられる。

— 第百十師団野戦病院 —

昭和十九年九月、思い出多き北京を發つ。第百十師団野戦病院転属の十数人は再び京漢線を南下、黄河北方数十キロの新郷にて下車、徒歩にて黄河北岸へ出發の途に着く。

九月といえども残暑の炎天下、途中一泊でようやくとどき着く。中国第二の大河はその名のおと濁流なり。流速早く、現地人の舟で舵を巧みに操って渡るも流されて数百メートル下流に着いてしまった。

鄭県から西方洛陽へ第百十師団野戦病院勤務のため河南省洛陽県臨汝鎮臨汝に着く。ここで約五カ月間待機、その間内地より慰問団来る。歌手の晁照子一行、浪曲師の玉川勝太郎一行、部隊挙げでの大歓迎だった。当病院は隊長大野軍医大尉以下ほとんど岡山、広島の出身兵で編成されていた。

— 豫鄂作戦 —

昭和二十年三月末ごろ、河南省西方方面の作戦に出動の命令下る。このころより制空権は敵機の独占となり、連日執拗に來襲する。このため昼間の前進は不可能で、第一線への追及の行動は夜間となる。

日没に發進した部隊は徹夜にて三十キロ以上進み夜明けまでに停止、速やかに一日分の食事を準備、対空遮蔽して休眠するのである。昼間の空襲は激しく、一兵でも発見すれば機銃掃射の雨が降る。弾薬満載のトラックが攻撃され積載弾薬が誘発して大損害を受けた。また馬車の輸送隊が急襲され哀れにも路傍に全滅、数百メートルにわたつ

て目も当てられぬ惨状であった。

この状況下にも数日間強行軍を続け、西狭口と言う街に着く。ここで民家を接収して直ちに野戦病院を開設す。前線より負傷者続出で収容、応急手当、後送など夜間の多忙はその極みに達す。負傷者は多種多様で、苦痛に呻く者、手足を切断せる者、傷口にウジ発生して、その苦痛は見るに忍びない。目鼻口耳と至る所にウジが発生して残酷極まりなし。また破傷風、瓦斯瘰疽に罹っている者、これが人間なのか生地獄とはこのことか、実に阿修羅の光景なり。

夜明けまでに後送を終わらなければ危険なれど、重傷者をトラックに乗せること遅々として進まず、診断書と照合するため名を呼べど応答があつたりなかつたりである。

連日P 60 戦闘機、B 25 爆撃機の来襲があり、防空壕もなく、岩塩の倉庫に入りて直撃弾を避ける。我が軍に対空火器がなく敵機のなすがままなり。敵機は超低空低速にて悠々と旋回し、投弾と

機銃掃射を繰り返す。空襲の度に、これまでの命かと観念するのだった。ただ不思議なことに我が野戦病院を開設している民家だけは攻撃を避けている感あり。

数日後にさらに前進、とある川沿いの民家を接収して病院開設するが地名は不詳で、最前線に近く終日銃声や砲爆撃の音が絶え間ない。

敵機はガソリンを撒き、それに曳光弾を発射して瞬時にして一面火の海となる。このために火傷を受けて収容する兵数知れず、顎を負傷し呼吸困難の一将校を収容せるも、肺水腫を起し苦痛のため手榴弾にて自決す、哀れなり。

このころ糧秣も乏しくなり、少量の主食、蟹、雑草など採りて食す。ある日、傷兵後送の責任者として数台のトラックに分乗、数十キロ後方の内郷兵站病院まで護送の任に当る。夜間行動のためどこで敵の待ち伏せ攻撃を受けるかもしれない。夜明けまでに無事患者を引き渡して任務は終了であるが、連日の不眠不休のため、当病院で前後不

覺に眠ってしまった。

昼ごろ猛烈な空爆音に目覺めた。付近には一兵もいない、防空壕へ入ったのだろうか、どうにも眠く仕方がない、運を天に任せて再び深い眠りに落ちたのだった。

夕刻、馬車に便乗し前線に帰隊す。なお負傷者は続々となだれ込む。一日の睡眠も三〜四時間、空襲は日増しに熾烈となり、防空壕の必要に迫られる。岸を掘っていると突然大きな穴が開いた。

驚いて調べると現地人の棺桶の貯蔵庫で、白木や黒塗りの立派な棺が六個あった。中国人は棺桶は大切な財産であるので隠していたのだろう。広さはざつと六〜七坪、勞せずして格好の防空壕となる。以後事務的なことはここで行い、棺の中での睡眠もまた乙なものなり。

負傷者は日ごとに増加し、收容、応急手当、後送もままならず、時既に昭和二十年七月であった。毎夜、桐油の明りにて診断書の整理、死亡者履歴書の作成等連日の不眠と過勞と無数の蚊の襲来に

よりついにマラリア熱帯熱に侵されることとなり、無念や入院の止むなきに至る。仕方なく部隊に別れを告げ後送され、再び当部隊に復帰することは無かった。高熱にうなされながらトラックに揺られ、某地点で休養中に病状は快復になった。

—終戦—

昭和二十年八月十五日午後、停戦の報道あり、その後無条件停戦、無条件降伏などと次々と情報が入る。まさか降伏はないだろうと思つたが、次第に真相が判明せり。戦争は終わったのだが信用するには時間が必要だつた。誰の顔も皆虚脱な感じ。今まで張り切つていた氣迫が一度に堰を切つて抜けると同時に、我らの今後の運命はいかになるか新しい緊張感が脳裏をよぎる。

再びトラック輸送隊十一両、機関銃武装に便乗して一路後退、途中地雷に触れるも被害輕微、ついに河南省開封に到着、ここで第二回目の転属となる。すなわち支那派遣軍独立歩兵第三大隊略称「至毅」第一五八六部隊、部隊長は堀源明、第

二大隊（練成隊）、隊長は大石格である。練成隊とは戦傷病兵で全快し、原隊復帰まで身体を訓練する隊で、各兵種の兵にわたり、また全国各地より出身兵よりなる混成部隊である。

ここでは陸軍衛生軍曹に命ぜられる。この兵舎は最近建設せるものにして、諸設備も整い、兵力一個師団約一万人の収容能力がある。

―「捕虜」生活―

戦陣の戒めを書いた「戦陣訓」に「生きて虜囚の恥ずかしめを受けず」と唱つてあるが、その虜囚となつてしまったのだ。誰も語ろうとはしないが戦争が終わつて良かったと思つてゐるだろう。

練成隊百数十人、幹部候補生約七百人は中国軍蔣介石総統の「捕虜」となつた。武装は解除されたが衛兵（門衛）だけは武器の携帯が許された。自分は衛生部なれば軍医以下数人で兵員の健康管理に当る。

祖国への帰還はいつか見当もつかぬ状況なれど部隊はその準備に追われていた。気心の相通ずる

者、隊長以下二十五人集まりて敷島交友会を作り、内地帰還後は交友を親密にするとの趣旨で結成す。だが帰還後の文通も次第に途切れ現在交信せる者一人となつた。

―帰還命令 駐留地出発―

昭和二十一年春まだ浅き三月初旬、待望の帰還命令下る。全員夢かとはかり小躍りして喜ぶ。輸送は無蓋貨車にて建築経験者が連日屋根作りに出動す。その間各自身辺を整理して出発に備う。

貨車には数日分の食糧として蒸しパンを麻袋に入れて積み、その上に乗つたが、食物の上はとも心地よくない。その前に中国兵の私物点検を受け、再来することは先ずないであろう開封を後に、希望の汽笛が高らかと鳴つた。列車は徐州、南京を経て、出発後四昼夜ほどで上海に到着す。

―大陸を去る―

三月末乗船、船はアメリカ軍上陸用舟艇でLST二、七〇〇トン、即製の船で大波に弱いとのこと、祖国の土を踏むまでは命の保証はない。船は

静かに岸壁を離れ、黄浦江を出て揚子江を下り、東シナ海に出る。船は次第に揺れが増し甲板などとても歩けたものではない。

船はすし詰めだったが、自分等は幸にして船側の三段ベットの場所に当たり、空間も余裕があり助かる。各自は船酔いになり食事のままならぬが、自分は軽く有り難きかなと思う。玄界灘に差し掛かると海豚の大群に会い、数十頭が船と競争する光景に会う。二頭ずつ丁度馬が海上を跳んでいる様である。

—内地帰還—

四昼夜の船旅も玄界灘の荒波を無事乗り越え山口県仙崎港に入港、一命ありて再び祖国の山河をこの目で見る、紛れもない日本である、誰の眼も感涙に潤んでいた。終戦を知らず大陸に散り海の藻屑となった戦友に思いを馳せるとき、正に痛恨の極みである。

上陸後、部隊は解散、そこで偶然にも第百十師団野戦病院の方々に会った。同じ船に乗っていた

のであった。生死を共にした戦友ともしばしの別れである、あるいは永の別れかも知れない、お互いの健康を祈り再会を誓いつつそれぞれの故郷へ向う列車に乗る。自分は山陰線を西へ下り、下関から山陽線に乗り換え、一路郷里へとひた走る。綾部駅到着が昭和二十一年四月四日、旅館で一泊、翌五日大原へ帰着す。

—復員—

昭和二十一年四月五日川合村長さんに報告し、復員完結現役満期除隊となる。

—後記—

以上我が体験の記憶をたどりつつ、ここに大略をす。

戦争は絶対に阻止しなければならない。その非道悲惨さは、戦争体験者が痛切に感ずるところなり。子々孫々末代まで言い伝えるべきことである。